

<研究ノート>

モノログ・タスクにおける日本人英語学習者の 発話語彙コーパス分析

蓬 菜 朋 子

キーワード：スピーキングテスト モノログ 発話語彙

1. はじめに

本稿では、スピーキングテストのモノログ・タスクにおける大学レベルの日本人英語学習者（以下、日本人英語学習者）の使用語彙について、コーパス分析プログラムを用いて検証した一部を報告するものである。

日本国内外の英語スピーキングテストの中で、数多く採択されているタスクの一つに「モノログ」がある。Horai (2009)では、テスト環境下でトピックと共に与えられる条件の違いが、モノログのパフォーマンスに与える影響をテストスコア、発話の正確さ、複雑さ、流暢さの観点から検証を行っている。本研究では Horai (2009)の被験者のうち日本人英語学習者のモノログの発話データをタスクのトピックと提示条件（4種）と英語習熟度（3レベル）に分別し、使用語彙を分析する。

2. 学習者コーパスの構築

分析対象は、Horai (2009) の被験者から 31 名の日本人英語学習者とした。英語習熟度別に発話総語数と一人当たりの発話語数を示したのが表 1 である。英語学習者の各習熟度レベル(High, Middle, Low)は、モノログのパフォーマンスを IELTS¹のスコア基準で採点し、それをもとに分類されている。

ここで一人当たりの発話語数を比べると、Lowレベルの発話語数(量)が少ない。カイ二乗検定を用いて検定した結果、有意差が認められた($\chi^2=94.952$, $df=2$, $p<.01$)。この結果からHigh/ MiddleレベルとLowレベルの一人当たりの発話語数に差があると解釈することができる。このことから、発話量はスコアを反映する一つの要素になっている可能性があるといえる。

習熟度 レベル (人数)	発話語数 (総語数)	一人当たりの 発話語数
Low (10名)	3,860	386.0
Middle (20名)	13,566	678.3
High (11名)	7,339	667.2

表 1. コーパスサイズ

3. コーパス分析

本研究では、コーパス分析プログラムの一つである Antconc3.2.4w を使用する。日本人英語学習者 31 名の学習者コーパスを文法項目の中から関係代名詞に着目して分析する。次に単語リスト(Word List)と単語連鎖(trigram)については Antconc3.2.4w の機能を使ってそれぞれの頻度を求める。

3.1. 関係代名詞

発話言語の質的分析には、関係代名詞の使用頻度に注目する。関係代名詞は、O’Sullivan, Weir, and Horai (2006)で質的、量的に難易度が同等と検証された4つのIELTSモノログテストで提示されるセンテンスに使われる唯一の文法項目である(表2参照)。表3は、モノログ・タスクでの発話における、関係代名詞の使用頻度を習熟度別に調査し、1万語中に出現する頻度に換算した結果をまとめたものである。

まず関係代名詞which, who, that, whoseの4つのうち、whoseの使用頻度は他の3つに比べて低いことがわかる。その理由としてwhoseは、与えられるセンテンスに使用されていないことが考えられるが、High/ Middleレベルでは各タスクで1度の出現があった。他の3つの関係代名詞which, who, thatについては、タスクによって使用頻度が異なる傾向が見られた。

タスクBは準備時間のない2分間のモノログであるが、トピックと共に与えられているセンテンス “Describe an enjoyable event that you experienced when you are at school.” には、関係代名詞thatが含まれているものの、各レベルでthatの出現はない。ただしHighレベルにおいて、関係代名詞whichが使用される理由の一つに、与えられたセンテンスにあるthatをwhichで言い換え、トピックセンテンスとして発話している学習者がいたことが挙げられる。

タスクCは、「教師」についてのモノログであることから、各レベルで関係代名詞whoが他の3つのタスクに比べて多く使われている。

タスクDのトピックは、“a film or a TV programme” で、発話時間が1分間と制限がある中、各レベルでwhich, who, thatの使用があったが、Middleレベルのwhichの使用頻度が他のレベルよりも多い。

以上の観点から、関係代名詞which, who, that, whoseの使用頻度は、各タスクと習熟度レベルで異なることが分かった。その中でもHighレベルの関係代名詞の使用は、who

とthatにおいて頻度の合計数が最も高いのが特徴である。Highレベルでは発話に複文をはじめとする複雑なセンテンスを産出できるようになる傾向にあり、これが評価されて高スコアにつながっているかどうかを、今後、他の文法事項でも分析する必要がある。

タスク A	Describe a part-time/holiday job that you have done. (1 分間準備、トピックへのヒントあり、2 分間モノログ)
タスク B	Describe an enjoyable event that you experienced when you were at school. (準備なし、トピックへのヒントあり、2 分間モノログ)
タスク C	Describe a teacher who has influenced you in your education (1 分間準備、トピックへのヒントなし、2 分間モノログ)
タスク D	Describe a film or a TV programme which made a strong impression on you (1 分間準備、トピックへのヒントあり、1 分間モノログ)

表 2. IELTS モノログタスクのトピックと提示条件

	which					who				
レベル/タスク	A	B	C	D	合計	A	B	C	D	合計
Low	3	0	3	5	10	3	0	13	8	23
Middle	6	3	5	12	26	1	1	13	2	18
High	5	14	1	3	23	7	0	18	4	29
	that					whose				
レベル/タスク	A	B	C	D	合計	A	B	C	D	合計
Low	0	0	0	8	8	0	0	0	0	0
Middle	3	0	3	2	8	0	0	0	1	1
High	5	0	3	4	12	0	1	1	0	2

表 3. 関係代名詞の使用頻度 (10,000 語あたり) (習熟度・タスク)

3.2. 単語リスト(Word List)

Antconc3.2.4w を用いて、モノログで使用された上位 10 位の単語の頻度情報を 1 万語中に出現する頻度に換算してリスト(Word List)を作成したものが表 4-1 と表 4-2 である。タスク (4 種)と英語習熟度 (3 レベル) に分けて分析をまとめている。

まず、表中の z は、発話中のポーズを示す記号であるが、各習熟度レベルでタスク A、B、C (2 分間のモノログ)では上位 5 位内に入っている。タスクや習熟度によってポーズ数の増減があるが、特に Middle レベルは High/Low レベルに比べてポーズの頻度が高いことがわかる。このことから Middle と High レベルの違いは、ポーズの数が一因になることが考えられる。しかし、スピーキングにおけるポーズは、「頻度」だけでなく「長さ」や「取り方」で、評価 (テストスコア) の「流暢さ」に影響する可能性がある。

次に、接続詞 and の使用頻度であるが、タスク B、C、D では High/Middle レベルで上位に入る。タスク A に比べて、タスク B、C、D は準備時間、インプットの量、発話時間にそれぞれ負荷がかかっているため、and を使用してセンテンスをつなげる傾向にあり、頻度が高くなっていることが推測できる。

また、各タスクでのキーワードになる語を見たところ、10 位以内に出現するのは、タスク A では全レベルに job、タスク B では High/Middle レベルに school、タスク C では High/Low レベルで teacher が入っている。High レベルにおいては、3 つのタスクで 10 位以内にそれぞれのキーワードが出現している。

<タスク A/B>

[level: 習熟度レベル、rank:順位、freq:頻度]

JOB (Task A)							EVENT (Task B)						
level		High		Mid		Low	level		High		Mid		Low
rank	freq		freq		freq		rank	freq		freq		freq	
1	69	I	116	I	44	I	1	44	and	81	and	23	I
2	39	to	65	z	15	z	2	40	I	79	I	21	and
3	36	the	58	the	15	the	3	30	was	67	z	17	z
4	32	and	57	and	14	and	4	28	z	55	was	15	was
5	28	z	50	to	10	job	5	27	to	48	the	13	the
6	22	a	42	a	8	to	6	23	the	41	to	12	we
7	20	job	42	job	8	for	7	22	a	39	a	11	it
8	18	was	31	was	8	was	8	21	we	33	it	10	to
9	15	it	21	in	8	a	9	16	it	32	we	9	of
10	14	for	21	that	8	that	10	15	school	25	school	9	so

表 4-1. タスク別(4 種)・習熟度別 (3 レベル) の単語リスト(Word List)
(10,000 語あたり)

<タスク C/D>

[level: 習熟度レベル、rank:順位、freq:頻度]

TEACHER (Task C)							FILM (Task D)						
level		High		Mid		Low	level		High		Mid		Low
rank	freq		freq		freq		rank	freq		freq		freq	
1	50	I	69	I	24	I	1	27	I	41	I	16	I
2	41	and	60	and	19	she	2	25	and	40	and	14	the
3	27	z	48	z	17	and	3	19	it	36	z	12	it
4	24	she	42	he	15	he	4	17	a	33	the	11	a
5	23	to	41	to	14	z	5	15	the	30	it	9	was

表 4-2. タスク別(4 種)・習熟度別 (3 レベル) の単語リスト(Word List)
(10,000 語あたり)

6	21	was	38	a	12	is	6	12	z	29	was	9	and
7	17	a	33	the	12	me	7	10	was	27	a	8	z
8	17	in	32	in	12	the	8	8	's	18	about	6	is
9	15	teacher	31	was	11	teacher	9	7	to	17	is	6	that
10	15	the	28	is	10	to	10	6	is	15	to	5	me

表 4-2. (続き)

3. 3. 単語連鎖 (trigram)

コーパス処理手法の一つに、データ内に出現する単語、または品詞のすべての連鎖を特定し、その頻度を求める n-gram 分析がある。ここでは AntConc3.2.4w を用いて、タスク別、英語習熟度別 (3 レベル) に発話で使用された単語 trigram を求める。

頻度情報を 1 万語中に出現する頻度に換算して、タスク A の上位 10 の単語 trigram をまとめたものが表 5 である。

[level: 習熟度レベル, rank: 順位, freq: 頻度]

level		High		Middle		Low
rank	freq		freq		freq	
1	14	I have to	17	part time job	16	high school student
2	11	part time job	7	I had to	13	when I was
3	11	we have to	6	a part time	10	I worked at
4	8	a part time	6	I did not	8	a lot of
5	7	I had to	6	I have not	8	high school students
6	7	I think I	6	so it's	8	I did not
7	5	and it was	5	a lot of	8	I worked for
8	5	have to do	5	I think I	8	is very fun
9	5	I got the	5	I was a	8	junior high school
10	5	when I was	4	and I think	5	and I I

表 5. タスク A に出現した上位 10 の trigram 集計

表 5 から、High/Middle レベルに I have to, we have to, I had to という表現が使われていることが分かる。タスク A のトピックは part-time/holiday job であるが、仕事をするようになった理由や、仕事の内容の説明、仕事の自己評価を High/Middle レベルでは Low レベルよりも述べる傾向にあったことが背景にある。また、キーワードの a part time, part time job は High/Middle レベルで上位に入る連鎖である。一人称主格 I を含む連鎖は全レベルで出現しているものの、High/ Middle レベルと Low レベルの間には、使われる語の連鎖と頻度に違いがみられた。

次に、表 6 は発話時間が 1 分間に制限されたタスク D の上位の trigram である。頻度情報は、1 万語中に出現する頻度に換算している。トピックと共に提示されるセン

テンス"Describe a film or a TV programme which made a strong impression on you."の中の trigram の連鎖の出現を各レベルにおいて見てみると、特に Low レベルでは上記のセンテンスに関連するものが上位 10 位の中で 8 つあり、“strong impression on”の頻度が特に高い。タスク D は、発話時間が 1 分間という負荷がかけられているタスクだが、High レベルになると一人称主格 I で始まる連鎖が他のレベルよりも多くなる。このように同じタスクの条件下で単語 trigram をみることによって、レベル間で共通している連鎖もあるが、習熟度が高くなるとバリエーションが出てくる傾向にあることが分かる。

[level: 習熟度レベル、rank:順位、freq:頻度]

level	High		Mid		Low	
rank	freq		freq		freq	
1	10	impression on me	7	it is about	34	strong impression on
2	7	strong impression on	5	a strong impression	16	impression on me
3	7	when I was	4	a lot of	16	made a strong
4	5	a strong impression	4	I saw it	10	I saw it
5	5	I saw it	4	impression on me	8	I saw I
6	5	z it 's	4	made a strong	8	made me a
7	4	I did not	4	strong impression on	8	me a strong
8	4	I think it	4	which made a	8	that made me
9	4	it was quite	4	z I saw	5	a film or
10	4	made a strong	3	and it was	5	and that was

表 6. タスク D に出現した上位 10 の trigram 集計

3. おわりに

本稿では、日本人英語学習者のモノログ・タスクにおける使用語彙についてコーパス分析プログラムを用いた検証の一部を報告した。この手法を用いて、スピーキングテスト環境下でのモノログで発話された語彙を質的・量的に分析することができた。モノログでの総語数は Low レベルに有意な差が認められ、発話語彙については、タスクの提示条件と英語学習者の習熟度によって相違がみられた。今後さらに語彙知識や文法知識とパフォーマンスのスコアとの関連性をタスクや習熟度別に分析することで、スコアの妥当性の検証も可能になるとと思われる。またこれらの検証は、スピーキングテスト試験官の採点の信頼性と妥当性を維持するためのトレーニングでも利用

することが可能になるであろう。コーパス分析ツールの使用によって、テスト開発者、テスト研究者にとって、妥当性の高い英語スピーキングテストの作成、採点法への有益な分析結果を示すことができるといえる。

¹International English Language Testing System (IELTS): ブリティッシュ・カウンシル、IDP:IELTS オーストラリア、ケンブリッジ大学英語検定機構が共同運営で保有する英語運用能力評価試験

参考文献

1. 投野由紀夫 (編著) (2009). 『日本人中高生一万人の英語コーパス “JEFLL Corpus”—中高生が書く英文の実態とその分析』 小学館
2. 投野由紀夫,金子朝子,杉浦正利,和泉絵美 (編著)(2013). 『学習者コーパス活用ハンドブック』 大修館書店
3. Horai, T. (2009) Intra-task comparison in a monologic oral performance test: the impact of task manipulation on performance. Brown, A. and Hill, K. (Eds.) *Tasks and Criteria in Performance Assessment*. (pp.23-42). Frankfurt: Peter Lang.
4. O’Sullivan, B., Weir,C. and Horai, T. (2006) Exploring difficulty in speaking tasks: an intra-task perspective. In McGovern, P. and Walsh, S. (Eds.) *IELTS Research Reports, Vol. 6* (pp. 119-160). Canberra: IELTS Australia.

(信州大学 全学教育機構 専任講師)

2015年2月27日受理 2015年2月28日採録決定